



木曽林務課だより

12月

12月に入り、山が白く雪化粧する中、3局合同の採種園管理技術研修会としてヒノキ採種木の断幹作業を実施しました。

採種園管理技術研修会でヒノキの断幹作業を行いました

森林の持続的な公益的機能の発揮のため、森林を伐採した後には、成長、形質ともに優れた苗木の植栽が必要です。この苗木は、主に県内にある8箇所の採種園で採種された種子から生産され、木曽管内には南木曽町にヒノキの採種園である「大原採種園」があります。

良質の種子を安定的に供給するための採種園は、通常の森林管理と異なり、採種木を必要以上に大きくしないための断幹や、枝葉にしっかり陽光をあて球果をつけさせるための剪定等の丁寧な管理が重要です。長野県の森林は、十分に成長して伐採、利用の適期を迎えており、今後は多くの良質な苗木が必要とされる中、採種園を適切に管理して種子を安定供給していくことが重要です。

今回、職員が採種園の管理について学ぶ一環として、木曽地域振興局林務課は、同じヒノキの採種園を管理する上伊那、南信州地域振興局と協力して、技術研修会を行いました。

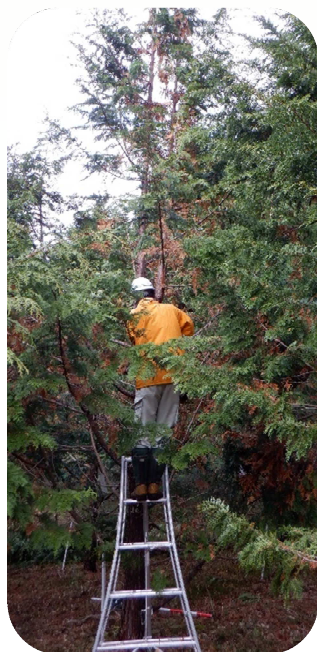
はじめに、木曽合同庁舎で、森林づくり推進課の担当者、林業総合センター研究員、採種園管理の経験がある職員から、県内の苗木の需給状況と課題、採種園の設置状況、採種園に植栽されている採種木（精英樹）の特性、採種園管理の内容や実施上の注意事項等の講義を受けて、実際に作業を行う大原採種園に移動しました。



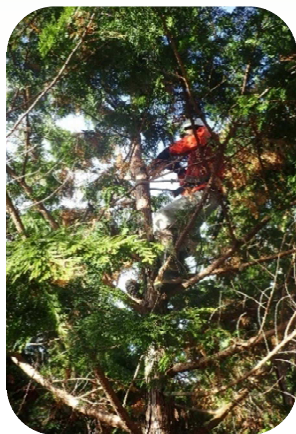
ヒノキ球果



講義の様子



断幹作業実習



大原採種園では、ほとんどの採種木が数年前に1回目の断幹を済んでいます。採種木を健全で採種しやすい樹形に誘導しておくには、数年おきに断幹等の管理作業を適期（11月から12月）に地道に継続することが重要です。

参加した職員は、林業総合センター研究員などから、断幹位置などの指導を受けてながら、一本ハシゴや三脚を使って、残存させる枝を傷つけないように丁寧に断幹を行いました。

森林の持続的な公益的機能の発揮のため、こうした技術や知識を学ぶ取り組みを今後も続けていきたいと思っております。